

上米山中学校区



力もちの行光さん

毘沙門杉（びしゃもんすぎ）

昔谷根に行光さんという力持ちのお坊さんがいた。荒れた日に四十キロメートルもある出雲崎まで魚買いに行ったり、時にはもっと遠くの松之山まで風呂入りに出かけたりしていた。

ある日、高いがけと深い谷にはさまれた細い道で、谷根から柏崎へ行く牛と柏崎から谷根へ行く牛が出会った。ちょうど通りかかった行光さんは塩を積んでいた柏崎の牛を目よりも高くさしあげて、まきを積んだ谷根の牛を通してやったという。

万地が平（まちがだら）

谷根の「万地が平」というところに大きな岩がある。その岩の表面に珠数（じゅず）の玉と房のあとがある。

これは、谷根のお万が女人禁制の法度（はっと）を破り、米山の頂上をきわめた時、天狗（てんぐ）が怒ってお万をつかんで投げとばした。

お万のからだは、まりの様にとんで前山を越えて、この万地が平の岩にぶつかった。その時お万の手にした珠数がこの岩にあたったあとだという。

昔、谷根に上杉謙信公の勸請（かんせい）した毘沙門天があった。その境内に大杉があった。佐渡通いの舟から見ることができたという。

やがて廃寺になり、一人のきこりがこの杉を買って切って杉材にして売ったところがそのたたりでこのきこりはやがて死んでしまったといわれている。

白蛇池

谷根の沢は昔から大蛇の住みかとして知られていて、蛇とりがよく来て蛇の生き肝（きも）をとっていったといわれる。

とる方法は蛇と戦って蛇に吞まれて、蛇の腹の中に入り、腹中より刃物をもって破って出るといふ。そのために蛇とりには体中一本も毛がないといわれる。

小蛇は「まだ出来ていない」といって手をつけなかったそうで大蛇の肝だけをねらっていた。

名にしおう蛇沢で赤岩から下の沢まで二メートル巾ぐらゐの草がなびいていて

「大蛇がくだった跡だ」

と、教えられた事もあり、また白蛇が池で銀色のうろこが輝やく蛇

を見たという。

白蛇の池の水をもって来て、よく雨乞いをしたものだという。

お万が淵 (ふち)

お万が谷根の村に、嫁に来た。元来悪心が強く、人のものを盗んだり、あばれたり、うそを言ったりで、とかく輪中(村じゅう)のものに迷惑をかけたので、婿(むこ)さんはお万を離縁した。

離縁されたお万は他人の家に放火して騒いだので、輪中の者たちはお万をとりおさえ、俵につめて淵に投げすてた。お万は俵から手足を出し、もがえて岸にはい上ろうとしたが輪中の者たちは、たいまつでお万の手や足を焼いて淵に沈めてしまった。ここをお万が淵という。

お万が死ぬときに

「七生たたってやる」

と、のろって死んだ。その後この輪中に不幸がたえなかった。

山伏と狐

米山登山の山伏(やまぶし)が谷根の石原坂を通ると狐が一匹、昼寝をしていた。山伏はその狐の耳のそばに、ほら貝を近づけ力いっばい吹いたので、狐は驚いて目をさまし逃げていった。

山伏は浄土坂にさしかかると急に暗くなった。浄土坂というのは、

よくどこからともなく大ぜいの僧が集って、ろうそくをたくさんつけ、柿の木を中心にまるく集り、お経を読むことがあるので名づけられたものである。

山伏は急に暗くなったのを不思議に思って休んでいると、上の方から葬式がやって来た。山伏は柿の木に登って見ていると、葬式は柿の木の下に棺桶をおいて一休みした。

棺桶のふたがあいて、死人がむっくり起き出し、

「山伏いたか、山伏いたか」

と木に登って来た。山伏はおそろしくなって、どんどん柿の木を登った。枝の先に追いつめられた山伏が最後につかまった枝が折れてどしんと地ひびきたって落ちてしまった。畠仕事をしていた人が驚いてみると山伏が柿の木から落ちたので、みんな集って介抱した。気がついた山伏は

「もう夜があけたのか」

とつぶやいたそうである。

犀が淵

谷根に犀(さい)が淵という淵があって、犀が住んでいるといわれていたが、だれも犀を見たものがない。

ところで、ある朝行興寺の赤牛がしきりに鳴くので、牛小屋のませをはずしてやると外へとび出した。しばらくするとびっしょり水にぬれて帰って来た。

こんなことが二・三日続いた。行光が不思議に思って、ある朝つ

いていくと、牛は谷根川をどんどんさかのぼって犀が淵の方へ行つた。犀が淵についた牛が「モウ」となくと、淵の水がわきあがって、犀が現れてきた。牛と犀の時ならぬ争いが始つていつ勝負がつくとも思われなかった。

行光は「赤牛がんばれ、赤牛がんばれ」と応援したら、応援に力を得て、赤牛はみごと犀を殺してしまった。しかし赤牛も全身傷だらけになり、角も折れて、とうとう、その場で死んでしまったという。

すすけ提灯 (ちょうちん)

谷根は昔、南朝の忠臣楠家の家来、和田正朝(まさとも)の子、小太郎が四条綴(しじょうなわて)の戦に敗れ、一時ここにかくれていたと言われて、下和田、上和田、和田小屋(窟)など和田にかわりをもつ地名が多い。

谷根の中央に一本の大きな榎(えのき)があり、和田某の骨を埋めて、目印に植えた榎と言われている。

いつのころからか、その榎にすすけ提灯がぶらさがり、夜遊びする青年はその提灯をみると腰が抜け、足がふるえて、立つことも歩くこともできないといわれた。

それからというものには谷根には夜遊びする若者はいなくなったそう。



谷根の嫁入りホーイホーイ

谷根の嫁入りホーイ ホーイ という俗謡があるように、谷根の嫁入り行列の先ぶれば、今でもホーイ、ホーイとかけ声かけて行くという。

昔、谷根に二軒の長者があつて、上の長者から、下の長者へ嫁がいくことになった。

やがて当日、嫁が出る時 合図に下の長者の家に向つて「ホーイホーイ」と呼びかけて、嫁立の時を知らせた。

それ以来、嫁の行列の先ぶれば「ホーイ」「ホーイ」と寄声を発して行くとのことである。

山もち

谷根では十月十三日を「十三夜」(じゅうさや)といつて、その日は山もちを作つてごちそうとする。山もちというのは、秋田のきりたんぼ、木曾の五へい餅のようなものである。これの起りにはこんなことがある。

山の炭焼きの所へ 相崎からお客がとれた。山の中のことで何もうごちそうがない。

おかか飯をたきながら、何ごちそうしようかと考えた。おかか飯はたきあがつた飯をそばにあつた手ごろの木で、とんとんとつき、う

つぎの枝をとって、がまの穂のようにそれにまきつけ、かんかんおきた火の上で、狐色に焼いて それに味噌をぬりつけ、またしばらく焼いて、客にすすめた。

客は一口食って、そのうまさをほめ、

「これはうまい、何というものか」

と聞いたところ、おかかは

「そらあ、山もちというだべ」

と、即座に答えたという。

今、冬の食べものとし冬食べるとからだだが暖って、小用に夜起きないでいいといわれている。

谷根のうまいものは、この山もちと笹ずしである。

猫が平

谷根の猫は踊りが好きで夏の夜など、よく猫が平に集って踊っているといわれている。いや猫がよく集って踊るから猫が平といわれている。

ある夜、踊りずきで、猫大将の太左エ門の猫が刻限（時間）になっても来ない。大ぜいの猫が心配していると遅れて太左エ門の猫がきた。

「どうしたのか」

と聞くと

「あついおじやー雑炊（ぞうすい）ーを食わせられたので急いで食べるわけにいかないのでおくれた」

と、言った。

谷根美人

義経が上輪に滞在した時、美しい一婦人の行きすぎるのを見て名前を聞くに、「谷根の旧家板屋の娘にてお富士である」と答う。義経は旅行の憂さ晴らしに、お富士を嫁にもらいたいと交渉したが娘は頑として聞き入れなかった。義経は恨めしうに、「今後、谷根に生まるるものは、みにくい女ばかりであろう」と悪口を言って立ち去られたという。

米山びくに落し

米山の吉尾口の一の坂に「つるべおとし」という難所があって金ぐさりで登らねば危険の所があるが、ここを「びくに落し」とも言っている。

女人禁制（にょにんきんせい）の聖山（おやま）とされていたころ、尼さんが米山へ登ろうとして神罰をうけて、ここからころがり落ちたので「びくに落し」と言われているのだそうだ。

注 米山は昔四方の峰に女人堂があって、これを四方屍羅場といい、これから上は、女は登る事を禁じられていた。